２０１８年（平成３０年）７月７日　土曜日
デーリー東北　１６面　掲載

夏の甲子園100回 青森県球史㊦

「全力で」公立勢初HR

三沢商（出場2回）

大舞台での経験 自信に

2015年8月11日の第4試合。2回戦の三沢商と花咲徳栄（埼玉）の一戦は、予定よりも1時間以上遅れて始まった。

照明がともる中、三沢商は序盤から花咲徳栄の猛攻を受けた。三回までに7失点。さらに2点を奪われ、0―9で迎えた六回裏。ようやく反撃機が訪れた。

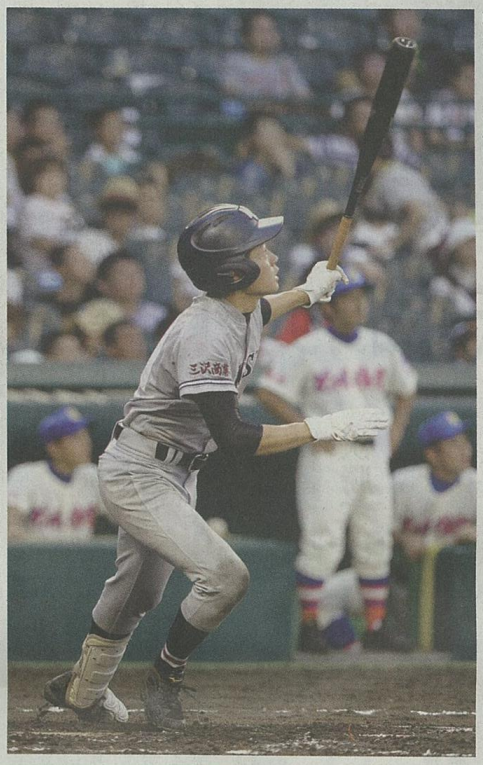
2死二塁、1ボールからの2球目。3番冨田日南登は内角低めに入った直球を振り抜いた。高々と上がった白球は左翼席へ飛び込む。「全力で振った。気付いたらスタンドに入っていた」。この一打は、青森県内公立校の打者が放った「第1号」だった。

試合前日は午後11時半まで素振りを続けた。「でかいのを打つ」。長打を打つイメージを持って、本番に臨んだ。だが、初の大舞台に力を発揮できず、1打席目は右邪飛、2打席目は三ゴロと凡退が続いた。

3打席目に入る直前、監督の浪岡健吾から声を掛けられた。「フライを打ってこい。上げろ、上げろ」。冨田に対し、普段は指示を出さない監督の〝思わぬ助言〟だった。冨田は「緊張がほぐれて、いつものバッティングを取り戻せた」と振り返る。

八回には、代打の金渕幹永がソロ本塁打を放った。大敗ではあったが、憧れの地に、ナインは確かな足跡を記した。

八戸学院大の冨田日南登選手


6回三沢商2死二塁の場面で、冨田日南登が左翼席に飛び込む2ランを放つ＝2015年8月11日、甲子園

大会(回)	年	出場校	回戦	スコア	対戦校
68	1986	三沢商	1	0−7	甲　西（滋賀）
97	2015		2	3−15	花咲徳栄（埼玉）

監督就任1年目だった浪岡にとっては、これが2度目の夏の甲子園だった。同校が初出場を果たした1986年の68回大会。中堅手として舞台に立った。結果は初戦敗退。甲西（滋賀）に0―7の完敗だった。

甲子園の雰囲気を知っているからこそ、1点を取る難しさは身に染みていた。選手、監督と2度目の挑戦でも勝利は手にできなかったが、29年の時を経て、遠かったホームを、教え子たちが本塁打という最高の形で踏んでくれた。

「ビックリした。公立校では今まで1本も出ていなかったわけだから。調子が良く長打力のある選手だったので、とてもうれしかった」。2本の本塁打は、浪岡の胸にしっかりと刻まれている。

八戸学院大に進学し、3年となった冨田は全国から集まった選手たちとの正選手争いで内野手の座をつかみ、活躍している。今春の北東北大学リーグ戦1部では、勝負強い打撃と安定した守備が評価され、初めてベストナインに選出された。

シード校を次々と撃破して甲子園の切符を勝ち取り、打者として輝いたあの夏の経験が、自信につながっている。「ここぞ」で打てるバッターになる」。冨田の挑戦は続いている。

（大澤諒）

※文中敬称略

デーリー東北新聞社提供